

黄眠日夏耿之介といえは、

飯田市民で知らぬ人はいないだろう、3人しか居ない飯田市の名誉市民の、それも第1号のお人である。愛した風越山頂の岩壁には「秋風や狗賓の山に骨を埋む」の句を刻み、また、りんご並木の南端には「密咒」の碑が建立され観光に一役かっているが、その碑文をすらすらと解せる市民はそう居ない。

15歳で上京、衆議院議員だった叔父樋口龍峽宅に寄宿しながら早稲田を卒業後、病弱の質に苦しめられながらも『聖杯』（後に『仮面』と改題）などに詩・随筆・翻訳・評論を発表し、また吉江喬松・芥川龍之介・西条八十らと愛蘭土学会を結

成するなど、大正期になると次第に文学者として認められつつあったが、大正11

年4月、32歳のとき母校早稲田大学文学部講師の職を得、大正13年7月再従妹にあたる鼎上山の中島徳三郎

黄眠先生が行く

名誉市民第一号 嶋 不濁

1

二女添そえと結婚してようやく落ち着いた感がある。

50歳を過ぎて昭和15年は避暑と療養で伊賀良、昭和20年から21年にかけては疎開で山本に居住した。わずかに2ヶ月いた石曾根竹村家の栗林の番小屋に命名した「栗里亭」の庵号のみ、菓子名に用いられ知られているが、伊賀良の「水鶏の宿」

はまだしも、「大風山荘」「育良山荘」はもちろん8ヶ月以上世話になった「凝花村舎」金澤家やその離れ

「雪後庵」の庵号を知る人は少ない。戦後再び上京、還暦を過ぎて青山学院大学教授に就任するなど、旺盛な研究と出版活動を続けたが、昭和

31年66歳のとき脳溢血で倒れ、以後没する81歳まで飯田市の用意した愛宕神社境内の居宅で晩年を送った。没後、その居宅が追手町に移築され日夏耿之介記念館となっていて、と知っている人が多いが、当時の居宅は未だに愛宕にあり、記念館は似せて新築されたもの

であることを知っている人は少ない。さらに河出書房新社から出版された「日夏耿之介全集」全8巻（昭和53年完結）は約19万円もするので、所蔵者も滅多に紐解くことな

く大切に飾ってある。全集なので、前述の避暑や疎開中の作品はすべて収録されてあるものと安心していても、たとえば疎開中の出来事を綴った小品を数多く収録する『随筆 読書山居人』（姫城書院・昭和21年9月刊）の24篇中8点、『随筆 秋の雲』（昭和22年3月刊）では29篇中24点が全集未収録で、その中には「七久里宵宮記」「天龍峽」「伊豆木の秋」「炬燵」「雪後庵余情」「雪虫」「光明寺」「嗚聲」「提琴手の思ひ出」「柿の樹」「天神山」「松助の墓」「雷雲供養」など、伊那谷に

とっては記念的な掌編群が全集には収録されていない。日記風に綴られたそれらの小篇は、登場人物や風景が身近ということもあろうが、極めて読みやすく、「密咒」の碑の如く戸惑うことなしに読めるいたって気取りのない文章である。

小稿は、狛介孤高の詩人日夏耿之介の思想内容を追うのではなく、全集に採録されることのなかった日夏の随筆作品を中心に35年ぶりに帰郷した没落地主の後裔・樋口圀登の目に映じた飯田の町と近郊の村、そこに住む人々との交流を再読しようとするものである。



愛宕に今も残る旧日夏住居